

財団60年のあゆみ

財団法人 旭硝子財団

af

発刊にあたって

当財団は、昭和7年(1932)に旭硝子株式会社の創立25周年を記念して設立が企画され、翌8年12月に同社より金50万円の出捐を得て「財団法人旭化学工業奨励会」の寄附行為が制定の運びとなり、翌9年2月に主務官庁から法人設立が認可されました。平成5年は創立60周年にあたります。

旭硝子株式会社は、創業者岩崎俊彌の国家的見地からの開拓者精神によって、わが国で始めて板ガラスおよびその原料であるソーダ事業の国産化に成功しました。その間、同社の血のにじむような研鑽努力があったことはもちろんですが、同時にソーダ灰工業の助成法にみられる国家・社会のご支援、学界の諸先生のご指導によるところが大きかったのであります。

同社創立25周年記念にあたり、故人となった岩崎社長の化学工業振興と研究開発重視の遺志に加えて、国家・社会ならびに学界への報恩のため、当財団が設立されたのであります。

当財団の事業の中心である研究助成では、主として応用化学分野を対象に、大学の教官や研究者の先駆的な研究を助成してまいりました。この助成は戦争末期までに及びましたが、戦後の混乱期に一時中断のやむなきに至りました。しかし、昭和30年(1955)には、財政基盤を整えて助成事業を再開したのであります。その後当財団は、時代の要請に応じて昭和36年(1961)に、名称を「旭硝子工業技術奨励会」と変更しましたが、設立以降約半世紀以上の間、その助成活動を通じて関係分野の研究の推進と技術の発展に、微力ながら力を尽くしてまいりました。

その後、社会環境は極めて急速に変化し、科学・技術の高度化、複合化、国際化、総合化が求められるようになりました。

そこで、当財団は平成2年(1990)4月に、社会の変化に対応して名称を「旭硝子財団」と変更し、新しい研究助成と顕彰を2本の柱とする新事業を展開いたしました。

新たな研究助成は、自然科学系にとどまらず人文・社会科学系をも含む広い分野に拡大し、さらに対象地域も従来に増して拡大いたしました。また、顕彰は人類がグローバルに解決を求められている課題として「地球環境」をとりあげ、この問題に大きく貢献した研究、活動を表彰する国際賞といたしました。

この両事業活動を通じて、文化と文明の調和を図り、社会の進歩、向上ひいては人類が真の豊かさを享受できる、新たな社会および文明の創造にお役に立ちたいと念じております。

翻ってみますと、当財団の今日ありますのは、役員として、あるいは研究助成の選考委員として財団運営に尽力いただいた学界の諸先生のご指導と財団関係諸先輩の科学・技術尊重の熱意によるものです。この年史編纂にあたり、これら諸先生、財団関係者ならびに研究助成を受けられた多数の方々からご寄稿頂き、錦上添花を添えてくださいました。これらの寄稿文を拝読して、研究助成のあり方や、助成金が研究活動のお役に立った一端、あるいは選考過程のご苦勞などがうかがえて、一段と責務の重大さと栄誉を痛感いたしました次第です。

ここに「年史」を刊行するにあたり、先輩諸賢の遺業を継承し、人類の更なる幸福を求めて活動することを再確認すると共に、皆様方のご支援に厚くお礼申し上げます、あわせて今後いっそうのご指導、ご鞭撻を賜わりますようお願い申し上げます、ご挨拶といたします。

平成6年2月

財団法人 旭硝子財団

理事長 山下 秀明

財団法人 旭硝子財団

目 的

次の時代を拓く科学・技術に関する研究助成、人類がグローバルに解決を求められている課題への貢献に対する顕彰等を通じて人類が真の豊かさを享受出来る社会及び文明の創造に寄与すること。

事 業

次の時代を拓く科学・技術に関する

- ・ 研究者、研究機関等に対する助成
- ・ 国際会議、シンポジウム等の助成及び開催
- ・ 情報の収集及び提供

人類がグローバルに解決を求められている科学・技術的な課題に関し

- ・ 顕著な業績のあった個人、機関等に対する顕彰

その他本財団の目的を達成するため必要な事業

歴代理事長



初代理事長 山 田 三 次 郎
(昭和 8 年度～昭和13年度)



第二代理事長 大 野 政 吉
(昭和14年度～昭和18年度)



第三代理事長 池田 亀三郎
(昭和19年度～昭和20年度)



第四代理事長 森本 貫一
(昭和26年度～昭和43年度)

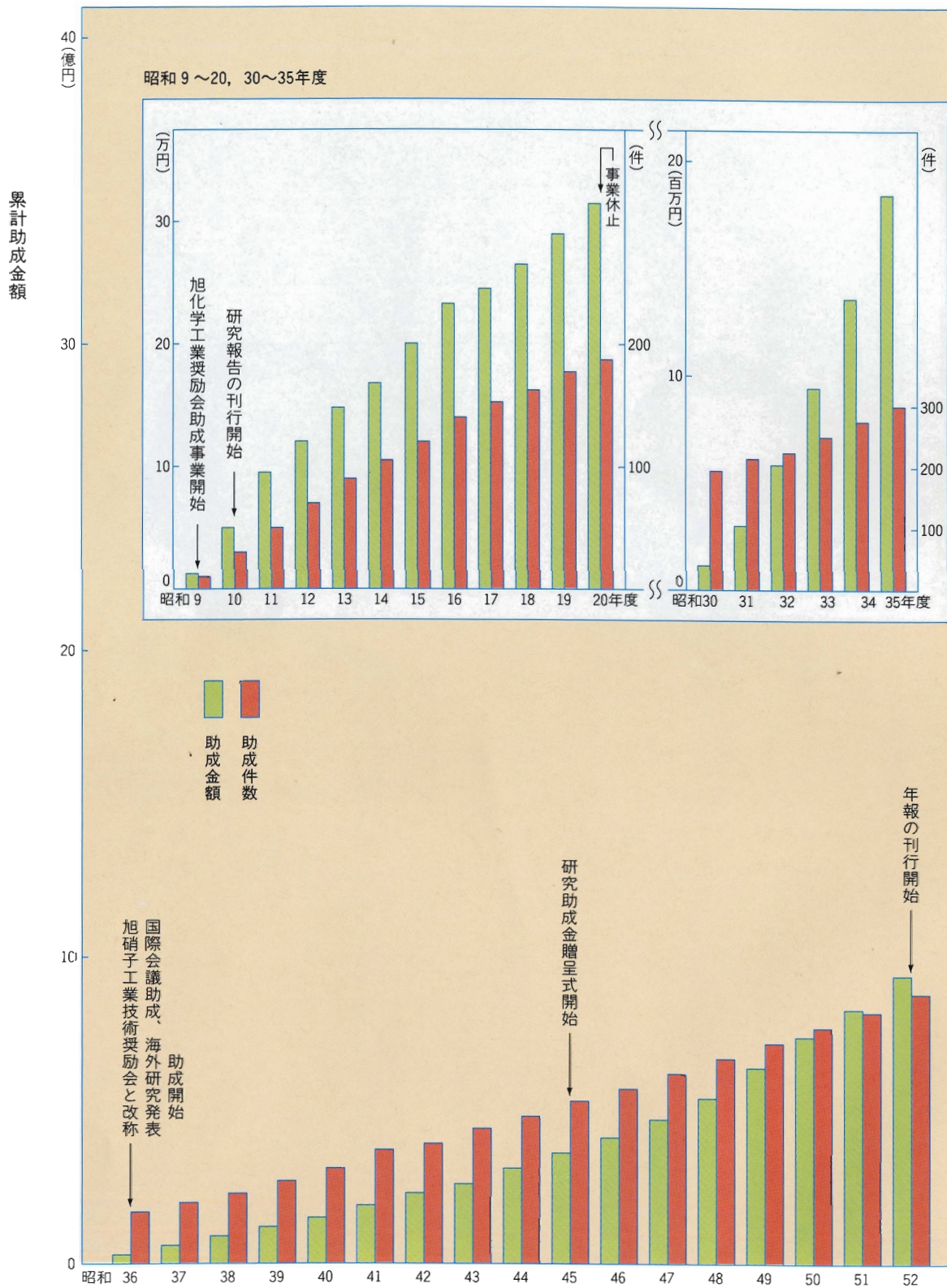


第五代理事長 倉田元治
(昭和44年度～昭和63年度)



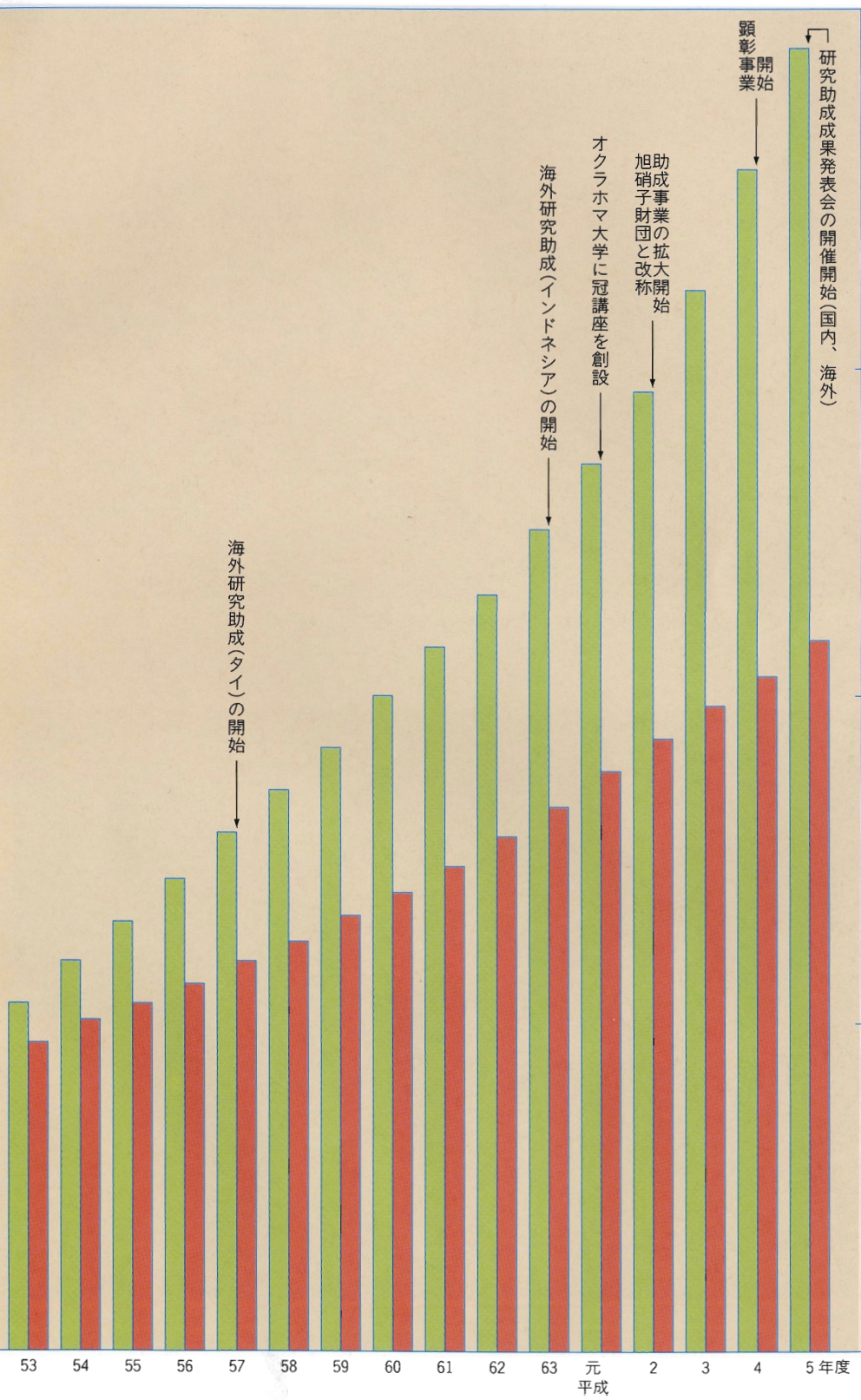
現理事長 山下秀明
(平成元年度～現在)

助成事業の60年のあゆみ——助成の累計金額および件数



累計件数

(件)



顕彰事業開始

研究助成成果発表会の開催開始(国内、海外)

助成事業の拡大開始
旭硝子財団と改称

オクラホマ大学に冠講座を創設

海外研究助成(インドネシア)の開始

海外研究助成(タイ)の開始

53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 元 平 成 2 3 4 5 年度

研究助成金贈呈式



経団連会館国際会議場における研究助成金贈呈式



研究助成金の贈呈

研究助成成果発表会



東京・国際連合大学国際会議場



タイ・チュラロンコン大学



インドネシア・バンドン工科大学



感謝状

顕彰表彰式典(第1回)



第1回学術賞受賞の真鍋淑郎博士(米国)

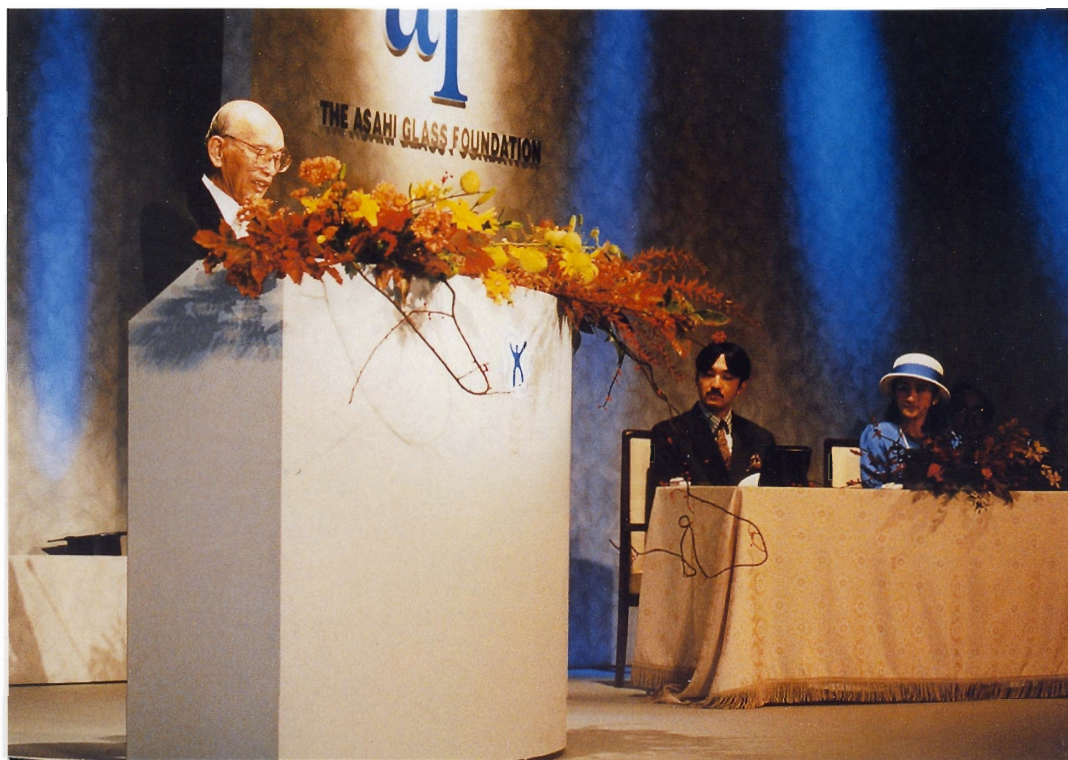


第1回推進賞受賞のI I E D(英国)の
代表者サンドブルック所長



第1回ブループラネット賞表彰式典——祝辞を述べる宮沢喜一内閣総理大臣——

顕彰表彰式典(第2回)



秋篠宮・同妃両殿下のご臨席の下に举行された第2回ブループラネット賞表彰式



表彰状とトロフィー

顕彰受賞者

第1回

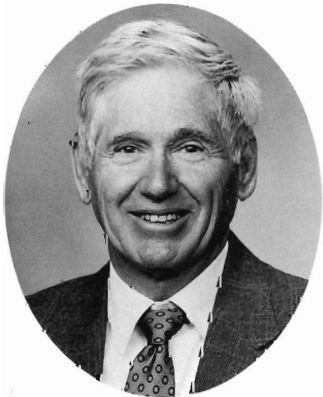


学術賞受賞者
海洋大気庁／地球
流体力学研究所(米国)
真鍋 淑郎博士



推進賞受賞者
国際環境開発研究所(IIED、英国)
サンドブルック所長および所員

第2回



学術賞受賞者
カリフォルニア工科大学
海洋研究所教授(米国)
チャールズ・デビッド・
キーリング博士



推進賞受賞者
国際自然保護連合(IUCN、スイス)の
マーチン・ホルドゲート専務理事および所員

受賞者記念講演会・シンポジウム



受賞者記念講演会、国際連合大学国際会議場



記念シンポジウム、国際連合大学国際会議場

刊行物



年報



助成研究成果報告



af-NEWS

目 次

口 絵

発刊にあたって 理事長 山下 秀明

第1編 財団60年のあゆみ

序 章 財団創立前史

[明治初年～昭和7年(1932)]

1. 研究助成型企業財団の先駆者 1
2. 岩崎俊彌と旭硝子の設立 2
3. 財団設立の歴史的背景 5

第1章 旭化学工業奨励会の時代

[昭和8年度(1933)～昭和35年度(1960)]

1. 旭化学工業奨励会の設立 8
2. 歴代理事長 9
3. 財務状況 11
4. 研究助成事業の経過と研究報告の刊行 13

第2章 旭硝子工業技術奨励会の時代

[昭和36年度(1961)～平成元年度(1989)]

1. 寄附行為の変更 17
2. 理事長および選考体制 18
3. 財務基盤の強化 20
4. 研究助成の拡大と発展のあゆみ 21
5. 国際会議助成と海外研究発表助成 26
6. 研究助成金贈呈式、大学訪問調査の開始 28
7. 研究助成金受領者の学協会賞等受賞の状況 30

第3章 旭硝子財団の時代

[平成2年度(1990)～平成5年度(1993)現在]

1. 新しい時代の要請 32
2. 理事長および新事業の企画 33

3. 寄附行為変更と運営組織	34
4. 新事業費と資金計画	36
5. 研究助成事業の一新	37
6. 顕彰事業の創設	41
7. 財団活動の普及	45
8. 世界に開かれた財団	47

第4章 研究助成テーマの技術的総括

1. 研究助成の変遷の総括	49
2. 分野別研究助成内容の変遷	54

第2編 財団によせて

第1章 財団関係者（各五十音順、敬称略）

1. 元役員

選考12年の回想	岩倉 義男	70
環境問題と財団への要望	大来佐武郎	72
財団での10年間	尾野 勇雄	74
研究開発を実りあらしめるには	金井 英三	76
思いだすままに	永村 正夫	78
奨励会の頃を回顧して	船岡 正男	80
奨励会の選考委員をつとめて	古川 淳二	82
旭硝子財団研究助成の思い出	前田 四郎	84
新財団の飛躍的發展を期待する	牧島 象二	86
随 想	村井 資長	88
随想文	安井 義之	90
旭硝子工業技術奨励会の思い出	山内 俊吉	92

2. 現役員

水害と対策	内田 祥哉	94
財団設立60周年を記念して	鎌田 仁	96
研究報告のオリジナリティー	木下 是雄	98
ブループラネット賞について	近藤 次郎	100
技術革新の世界の中で思うこと	坂本 朝一	102
世界見聞録断片	奈須 紀幸	104

第2章 研究助成金受領者 (五十音順、敬称略)

基礎的な研究を支えてくれた助成	井上 祥平 ……………	106
科学技術と価値観の変化	北沢 宏一 ……………	108
エンジニアリングの研究について	國井 大藏 ……………	110
シクロペンタジエンからフルオロ アルキル二分子膜まで	国武 豊喜 ……………	112
イノベーション時代における研究助成	児玉信次郎 ……………	114
分子フォトニクス研究の契機	齋藤 省吾 ……………	116
奨励会にまつわる思い出	齋藤正三郎 ……………	118
助成申請と研究成果	作花 濟夫 ……………	120
旭硝子財団との縁	塩川 二郎 ……………	122
旭硝子研究所および旭硝子財団とのご縁	篠田 耕三 ……………	124
研究の遍歴	篠原 功 ……………	126
研究助成の思い出とその後	清水 剛夫 ……………	128
熱帯で冷房を	鈴木 基之 ……………	130
旭硝子財団との十年昔日	砂本 順三 ……………	132
回想——旭硝子と旭硝子財団と	清山 哲郎 ……………	134
基礎研究の助成とその影響について	曾我 直弘 ……………	136
旭硝子財団の還暦を祝す——数多くの プラスアルファに感謝して——	只木 楨力 ……………	138
酸化重合と空気の化学	上田 英俊 ……………	140
旭硝子財団60周年にあたって ——お祝いと謝辞——	戸倉仁一郎 ……………	142
半導体結晶イオン電極とISFET	仁木 榮次 ……………	144
ミニ酵素としての有機金属化合物	野崎 一 ……………	146
設立60周年に寄せて	長谷川正木 ……………	148
研究助成の将来	籠野 昌弘 ……………	150
研究助成を受けて21年	平井 英史 ……………	152
旭硝子財団研究助成を受けて	本多 健一 ……………	154
触媒の分子設計と環境触媒	御園生 誠 ……………	156
超分子化学への道	村上 幸人 ……………	158
非晶質薄膜の研究、INTERGLADのこと	安井 至 ……………	160
ゴムとガラス繊維	山下 晋三 ……………	162
研究の恩人として	渡辺 信淳 ……………	164

資 料 編

第 1 章 寄附行為および理事・監事・評議員・選考委員

1. 寄附行為	167
表 1-1-1 寄附行為(旭化学工業奨励会)	167
表 1-1-2 寄附行為(旭硝子工業技術奨励会)	169
表 1-1-3 寄附行為(旭硝子財団)	170
図 1 組織図(旭硝子財団)	176
2. 理事・監事・評議員	177
表 1-2-1 理事・監事・評議員一覧(旭化学工業奨励会)	177
表 1-2-2 理事・監事・評議員一覧(旭硝子工業技術奨励会)	180
表 1-2-3 理事・監事・評議員一覧(旭硝子財団)	183
3. 選考委員	186
表 1-3-1 選考委員一覧(旭硝子工業技術奨励会)	186
表 1-3-2 選考委員一覧(旭硝子財団)	187

第 2 章 財務関係の推移

1. 基本財産および運用財産	189
表 2-1-1 基本金および剰余金(旭化学工業奨励会)	189
表 2-1-2 基本財産および運用財産(旭硝子工業技術奨励会)	189
表 2-1-3 基本財産および運用財産(旭硝子財団)	190
2. 収支計算書および貸借対照表	190
表 2-2-1 収支計算書(旭化学工業奨励会)	190
(1) 昭和 8 年度～18 年度	190
(2) 昭和 23 年度	191
(3) 昭和 30 年度～35 年度	191
表 2-2-2 貸借対照表(旭化学工業奨励会)	191
(1) 昭和 8 年度～18 年度	191
(2) 昭和 30 年度～35 年度	192
表 2-2-3 財産目録(旭化学工業奨励会)	192
表 2-2-4 収支計算書(旭硝子工業技術奨励会)	192
表 2-2-5 貸借対照表(旭硝子工業技術奨励会)	193
(1) 昭和 36 年度～46 年度	193
(2) 昭和 47 年度～平成元年度	194

表 2-2-6	収支計算書(旭硝子財団)	195
表 2-2-7	貸借対照表(旭硝子財団)	195

第 3 章 事業等の推移

1.	研究助成事業の件数、金額の推移	196
表 3-1-1	助成事業の件数、金額(旭化学工業奨励会)	196
表 3-1-2	助成事業の件数、金額(旭硝子工業技術奨励会)	196
表 3-1-3	助成事業の件数、金額(旭硝子財団)	197
表 3-1-4	助成事業の件数、金額(合計)	197
表 3-2-1	研究助成の件数、金額(旭化学工業奨励会)	198
表 3-2-2	研究助成の件数、金額(旭硝子工業技術奨励会)	198
表 3-2-3	研究助成の件数、金額(旭硝子財団)	199
表 3-2-4	研究助成の件数、金額(合計)	199
表 3-3-1	研究助成種別毎の助成件数、金額(旭化学工業奨励会)	199
表 3-3-2	研究助成種別毎の助成件数、金額(旭硝子工業技術奨励会)	200
表 3-3-3	研究助成種別毎の助成件数、金額(旭硝子財団)	201
図 3-1	研究助成の件数、金額の推移	204
図 3-2	研究助成の申請件数の推移	205
2.	研究助成テーマ等の推移	206
表 3-4-1	研究助成の種別(旭化学工業奨励会)	206
表 3-4-2	研究助成の種別(旭硝子工業技術奨励会)	206
表 3-4-3	研究助成の種別(旭硝子財団)	206
表 3-5-1	研究助成一覧(旭化学工業奨励会)	208
表 3-5-2	研究助成一覧(旭硝子工業技術奨励会)	217
表 3-5-3	研究助成一覧(旭硝子財団)	267
図 3-3	研究助成金受領者の所属別分布	295
図 3-4	研究助成金受領者の職名別分布	296
図 3-5	研究助成テーマの分野別分布	297
3.	研究助成と学協会賞等受賞	298
1)	研究助成金受領者の学協会賞等受賞状況	298
表 3-6	研究助成金受領者の学協会賞別受賞数一覧	298
2)	各分野における研究助成と受賞	298
表 3-7-1	無機化学分野における研究助成と受賞一覧	298
表 3-7-2	有機化学分野における研究助成と受賞一覧	303

表 3-7-3	化学工学分野における研究助成と受賞一覧	306
4.	その他事業	308
表 3-8-1	国際会議助成一覧（旭硝子工業技術奨励会）	308
表 3-8-2	国際会議助成一覧（旭硝子財団）	312
表 3-9-1	海外研究発表助成一覧（旭硝子工業技術奨励会）	317
表 3-9-2	海外研究発表助成一覧（旭硝子財団）	330
表 3-10	研究報告刊行一覧	333
年	表	334
参	考文献	337
年	史編纂にあたって 専務理事 白神 修	338
あ	とがき	339

本書の構成

本書は、第1編「財団60年のあゆみ」、第2編「財団によせて」の2編に資料編を加えた3編からなる。

第1編は、当財団が旭化学工業奨励会、旭硝子工業技術奨励会、旭硝子財団と名称を変更し、活動を刷新しながら進めてきた60年間の変遷を、役員および運営組織、財務状況、事業概況について時期別に述べた。

第2編は、寄稿によるものである。第1章には財団関係者の寄稿を、元役員、現役員に分けて、また第2章には研究助成金受領者の寄稿を掲載した。紙数の関係で当財団との係わりが深い一部の方に限らざるを得なかったことの一了解を得たい。掲載順は、五十音順とした。

資料編は、収集可能な資料はすべて掲載した。対象期間は、平成5年度（平成5年4月～平成6年3月）までとしているが、一部、役員・評議員一覧は、平成5年9月現在を記載した。

— 凡 例 —

- (1) 第1編の本文では、原則として常用漢字、新かなづかいを、数字はアラビア数字を用いた。
金額表示には、読みやすさのため補助単位を用いた。
図表は、文中に記載せず資料編に一括掲載した。
- (2) 第2編の寄稿文では、原則として原文を尊重したが、一部常用漢字、新かなづかいに修正し、文中引用の人名をフルネーム修正した。なお、寄稿文は平成4年2月から8月の間に受領したものである。
- (3) 人名は敬称を省略し、記述は敬語を使用しないことにした。
- (4) 年号は、日本年号を原則とし、必要に応じて西暦をカッコ内に併記した。